小野小町

菊池寛

人物

小野小町
老人
侍女　甲、乙、丙

舞台

小野小町の寓居。左手に竹垣がある。竹垣に門がついている。右に寝殿作りがある。秋の夜が暮れて間もない頃。侍女乙、丙が、座敷で灯を入れている。甲は庭に降りている。

侍女甲　そこへ立ってはいけませぬ。そこへ立ってはいけませぬと云うに。

（生垣の外にいる何かを追い払うている）

侍女乙　何事でござりまする。

甲　ほゝ、いつものように浮気男の垣のぞきでござりまする。

乙　ほんまに、けうとい事じゃ、お姫さまのお顔が、それほどに見たいかのう。

甲　それは、ことわりじゃ。おぬしが、業平さまのお顔をたった一目みたがっているように、青公卿や、青侍は、一度都に名高いお姫さまのお姿を、見たがるのじゃ。

乙　女に生れたからには、せめてお姫様が三つ一の御器量にでもなりたいものじゃ。

甲　業平さまを見たがっているのは、それはおぬし自身ではないか。

乙　ほゝゝなんの、おぬしの事ではないか。

（二人笑う）

甲　でも、お姫さまの御身分は、幸か不幸か分らぬ。これ迄、お姫さまに云い寄る殿御はみんな揃いも揃うて浮気男で、一人としてお気に召した殿御には出合わぬのじゃ。

乙　あんまり、よい御器量なので、撰りごのみをなさるからじゃ。頭の中将様でも左馬頭どのでも、蔵人の少将様でも、みんなよい男じゃが、お姫さまにはお気に召さぬのじゃ。

甲　可哀そうに、深草の少将様も、あんなにお通いなされても、お望みが叶うかどうか。

乙　でも、あの方だけは、ホンニ実意のある方に見えるわのう。

甲　お姫さまは、いつまで通わせて置くおつもりであろう。傍にいる妾達が気がもめてなら

ぬのう。

乙　（奥に気が付き）おゝ、こちらへおでましじゃ。（侍女立って出迎えの用意をする）

小町　（丙を具して奥から出て来る）おゝ、美しい、月しろじゃ。今日は、居待たぬ月じゃったのう。間もなくさし昇って来るであろう。

甲　お月様の上る頃には、あの方も、いつものように通っておわすでございましょう。

小町　ほゝうそうじゃ。今日は卯月の十一日から数えて幾日目にあたるかのう。

甲　卯月の三十日で、十九日、さつきの三十日で、四十九日、六月の三十日で、七十九日、今日はふみ月の十八日でございますゆえ、ちょうど九十九日でございまする。

小町　おゝ九十九日。もうアト一日じゃ。

乙　おゝ、アト一日とは、なんのことでございまする。

小町　おほゝゝゝゝ。そもじ達には云わなかったが、深草の少将どのが通い初めたのは、卯月の十一日なのじゃ。

丙　まあ、よく覚えていらっしゃりますこと。

甲乙　感心な、九十九日の間、雨の夜も、風の夜も、よくお通いになりましたことのう。

丙　おゝ一昨日の夜なども、あの嵐では今宵こそよもお通いはあるまいと、八つ頃、妻戸をしめようと参りますと、あの雨風の中で、男々しくも「小町殿の女の童と見た、深草の少将が、今夜もこれまで参ったと、お伝え下され」と柴折戸の外でおっしゃるのじゃ。

甲　おほゝゝゝゝ。まあ、なんと深い男の情であろう。妾が、もしおひめ様であったら、すぐ柴折戸をあけて、少将殿のぬれしおれたお身体を、あたゝめて上げようものを。

丙　妾も、そう思ったのじゃ。せめて、簀(す)の子の上までお通して、ぬれた狩衣(かりぎぬ)の袖をでもしぼってさし上げたいと。

乙　でも柴折戸をちょっともあけるなと、おひめ様のきつい法度(はっと)。

小町　（やゝ感動して）ほゝう、あの雨風の夜にも来られたのか。

丙　いゝえ。来られた所ではござりませぬ、あのひどい雨の中で、妾の姿が見えるまで立ちつくして居られたようでござりまする。

小町　まあ！　すまない、なんだか気がとがめて来た。

甲　おひめさま、なぜあの方にこんなに情(つれ)なく遊ばすのでござりまするか。

乙　何故こんなに情(つれ)なくなさるのでござりまするか。

小町　おほゝゝ。お前達には、今まではかくしていた。が、そんな話をきくと、なんとなく気がとがめて来たから、ざんげかた〳〵話そう。妾には世の常の男の心が、疑われてならぬのじゃ。今まで妾に云い寄ったあまたの男は、みんな如法(にょほう)の浮気男じゃ。たゞ妾の顔容(かおかたち)をめでて妾を弄(なぐさ)み物にしようとする人達ばかりだった。私は、それにこりたのじゃ。ほんとうに妾を思ってくれる方、私のためには、なんでもして下さる方、ほんとうに実意のある方でなければ身をゆるすまいと思ったのじゃ。深草の少将どのの懸想文(けそうぶみ)を貰ったと

き、妾はあの方が嫌いではなかったのじゃが、たゞでは許す気にはなれなかったのじゃ。あの方の心をためすために、百夜（もゝよ）通って来たら、なびこうと約束したのじゃ。

甲乙丙　まあ、驚きました。

小町　妾は、男の薄情にこり〳〵していたので、ついそうする気になったのじゃ。

甲　さようでござりまするか。妾はまた、おひめさまはお美しいので思い上って、いらっしゃって、惚れて来た男を、さんざんにおもちゃにしているのかと思っていました。

小町　（顔をあかめる）まあ！　でも、そんな心持も、少しはないことはなかった。でも深草の少将さまは、妾のわがまゝな云い付に服従しながら、本当に妾に打ちかってしまったのじゃ。

乙　とおっしゃいますと。

小町　初（はじめ）のうちは、あの方が夜ごと、柴折戸を叩くごとに、妾は得意になったのじゃ。妾のために深草から通うて来る男が一人いる。妾は、そう思うと、得意のうすわらいさえが、頬に浮んで来たものじゃ。ところが、今はまるきり違うてしまった。妾はあの方の熱情に打たれてしまったのじゃ。あの方が、妾の云いなり次第、毎晩通って下さる熱情に、動かされてしまったのじゃ。今では、柴折戸を叩く音が、きこえるごとに、苦しむのは妾なのじゃ。あの音は、妾の意地にも邪（よこ）しまな誇を責めるように響いて来る！「馬鹿な女め！お前は自分のつまらない意地と、誇とのために自分を苦しめ、人をも苦しめているので

はないか」こんなふうに、あの音が妾を責めるのじゃ。

甲乙丙　（黙っている。月が美しくさしのぼる。）

小町　なんと云ういゝ月夜だろう。恋人をすげなく返す、意地わるな女が、こゝに一人いるのじゃ。おゝ妾はなぜあの方の前に、なぜすぐやさしく女らしく、自分のすべてを投げ出さないのだろう。

甲　ほんとうに、そうなさりませ。何も、意気地に百夜（もゝよ）までお待ちになるには及ばないではございませぬか。

小町　でも姿は――……こちらで、折れて出るのはなんだかきまりがわるいのじゃ。

乙　でも、それはおひめさまの単なる意地ではございませぬか。

小町　でも、妾に、……妾の方から、云い出しておきながら。

丙　恋路（こいじ）に意地は禁物ではございませぬか。

小町　でも、……おゝ、虫の音が止んだ。あの方かも知れない、もう七つを廻っただろうから。

乙　ほんに、あの方のようでございます。

小町　おゝ！　あの方だ。今夜も、いつものように、おとなしく通って来られた！　おゝなんと意地わるな女だろう！　なぜ明日でなければいけないのだろう。もう、心ではあの方に許していながら、自分の意地のために自分の誇りのために、こんな月のよい晩に、自分を愛して呉れる男の胸に、身を投げかける大きなよろこびを自分で捨てようとは。

（トボ〳〵と柴折戸を叩く音がする）

小町　おゝなんと云う心憎い、叩き方だろう。明日が百夜目だと云うのに、あんなに素直（すなお）におとなしく叩いて居られる。おゝ、でも、あの方の胸のうちには、すべてを焼きつくさねば置かない熱情が宿っているのじゃ。

甲　そうでございますとも、おひめさま、今でござりまする。何明日まで、待つことがいりましょう、あなた様のお情を見せるために、今宵おゆるしなされませ。

乙丙　ほんとうに、お呼び込みなされませ。あなたさまの意地をお捨てなされませ。

（戸を叩く音止む）

小町　おゝ帰って行かれる！　帰って行かれる！　こんな晩に帰していゝかしら。あの方が、九十九夜（よさ）の間、通いつめたお情に酬いるために、妾だって。

乙　さようでございますとも、早うお呼び込みなさりませ。

小町　（思案して）ほんに、明日まで待たねばならぬと云う道理はない。おゝ足音が、あんなになってゆく。妾は意地を捨てよう。今じゃ。今じゃ。おゝ呼び返してたもれ。

甲　（柴折戸へかけつけ、それをあけて半身を出す）のうのう。申し深草の少将どの。少将どの。

小町　（心配そうに）おゝ聞えぬと見えて、足音が遠ざかる。もっと、大きい声で云ってたもれ。

甲　のうのう申し、少将どの。返させたまえ、引き返させたまえ。

外の声　（引き返して来た容子）何事でござる。

甲　されば、姫君の仰せでござりまする。九十九夜（よさ）の間をよくもお通いなされました。お情のあまりにうれしければ、情（すげ）なくお帰し申すことのつれなくて、明日とは云わず今宵、お目にかゝろうとのことでござりまする。美しい月の夜をもろともに語りあかさばやと、姫君の仰せでござりまする。

外の声　（しばらく語なし）

甲　なんと御思案なされます。はよう、お入りなされませ。

外の声　（語なし）

甲　さあ、早う。さあ、早う。

外の声　（語なし）

小町　（いら〳〵して）何とて、躊躇したまうぞ、はやくお入りなされませ。そもじ達、はよう行っておつれ申せ。

（侍女二人、かけ出て深草の少将と思われたる男を連れて入る。狩衣を着て、薄衣のかつぎをきている）

男　（不承不承に連れ込まれながら）お情は身にしみてうれしけれど、とてものことに明日まで待とうと存ずる。

小町　（怒って）　こは思いも寄らぬ仰せ、妾に会わんとて、百夜（もゝよ）は通いたもう、九十九夜（よさ）にて会わむと云うに、などてためらいたまう。はや、これへお通りなされ。

男　お志は、うれしけれども、今一夜だけ、待たせたまえ。なまじい、九十九夜（よさ）にて会いまつらむよりも、後の語り草にも、今一夜は通い申さむ。今日は、このまゝゆるしたまえ。

小町　はてさて、心なき仰せ。小町ほどの女が、誓いを捨てて、九十九夜（よさ）にても会わむと云うに、さりとては情（つれ）なき仰せ……。

男　世のきこえもござる。一生の思い出に、百夜通うて望みを叶えた方が、われとても晴がましゅう存じます。

小町　えゝ、なんと仰せられる。

男　はてさて、男の意地に、いま一夜は通わさせ給え。明日こそは晴れて！　おめにかゝろう。えゝこゝを放し給え！

小町　えゝきかぬ！　きかぬ！　小町ほどの女に恥をかゝせたそなた。よしさらば、おん身には、百夜にも会わじ、千夜（ちよ）にも会わじ、千夜万夜通（ちよよろずよかよ）いたもうとも、ゆめ会いまつらじ……。

男　はて、それは。（狼狽する）

小町　言葉を交すも、これ限にて候……。

（小町去ろうとする）

（男急にぺこ〳〵する）

男　のう。お待ちなされい。小町さま。

小町　（烈しい声にて）何事にて候ぞ。

男　今は、何をか包み申さむ。やつがれはまことは深草の少将にては候わず。

小町　えゝっ！

侍女達　まあ！　まあ！

男　少将どのに使わるゝ下僕（しもべ）にて候。

小町　えゝ、口惜しや、あの少将のひとでなし。

侍女甲　ほんに、にくい少将どの。

小町　あゝ、口惜しい。はかられた。

甲　一昨夜の晩の声も、そう云えば老人の声であった。

小町　どうしよう！　口惜しい。

男　そうお怒りなされますな。七十七夜までは、少将さま自らお通いなされたれど、この頃は、脚気の気味にて引きこもらせたまえば、やつがれ主人に代って候。

小町　えゝ口惜しや〳〵。

男　さらば、お自ら、通わせ給わずとも、おん身を思う真心に、変りはあらじ。これより深草に引き返し、主人を伴い申せば、あわれこの美しき月の夜に、千世までも契りたまえや。

小町　えゝ憎らしや。えゝ憎らしや。小町ほどの女をこうまで、たぶらかしたることの憎らしや。

男　などで、おん身をたぶらかさん。脚気にて、詮方なきことでござります。

小町　はて、口惜しや。この腹いせには、少将どのに生恥かゝせいでは、置くまじいぞ。はて、なんとしよう。なんとしよう。

男　おゝゆるされませ！　ゆるされませ。

中乙丙　ほんに、なんぞひどい仕返しをなされませ。少将の性悪に。

小町　おゝ腹いせには、よいことがある！　少将どのがそなたを代りに通わすならば妾も少将

どのの代りに、お身と契ろうよ。

男　え……それは。（狼狽する）

侍女　それは、おひめさまあんまりでござりまする。

小町　はて、この上もないよい思案じゃ。少将どのが妾に百夜（もゝよ）通わるゝとは、都の中に隠れもない沙汰じゃ。それほどに思う女を、召し使う下僕（しもべ）に奪られたとあらば、深草の少将は都の町々を面（おもて）をもたげては通られまいよ。おゝ今宵のうちに仇（あだ）を返すことのうれしさよ。そこなる男よ、すがめにてもあれ、鼻かけにてもあれ、今宵一夜は都に隠れもない小野の小町の思われ人ぞ。はや、あれへおん入り候え。

（小町男の手を取りて、奥へ引き入れんとする。男顫え出す）

男　これは、思いも寄らぬことにて候。やつがれははや六十路（むそじ）の坂を越えたる爺にて候。

（かつぎを取る）

侍女　まあ、まあ。

小町　えゝ、口惜しい。こう云った妾の意地じゃ。年のほどは何をかいとわむ。いざあれへ。

男　（逃げながら）はてゆるさせられい！　これは、少将どのに年ごろ、恩顧の者にて候。主人の思われ人に契ることの空怖しく候。

小町　えゝ、口惜しや。そなたまでが。

男　ゆるさせられい。

（侍女達の止めるのを振り切って逃げる）

侍女達　やるまいぞ。

小町　えゝ口惜しや、性わるな男どもじゃ。これからは世の男達に、かまえて心はゆるすまじいぞ。口惜しや、口惜しや。

――幕――

底本　菊池寛文学全集　第1巻
出版者　文芸春秋新社
出版年月日　1960